

I、IIから一つ選び、あとの設問に答えなさい。

I

資料1は品田知美他の著書『離れていても家族』の一部抜粋である。この本で筆者らは小学生の子どもを持つ東京とロンドンの家族に対しインタビュー調査を行い比較研究を行っている。以下の引用文ではイギリスの母親を中心に、両国の親の仕事のやりくりについて述べている。これを読んで、次の問いに答えなさい。

なお、解答用紙には各設問の論述の最初に「問1：」、「問2：」と記し、それに続けて記述すること。

問1 イギリスの親たちが子育てと仕事をなぜ両立しやすいか、イギリス特有の制度に触れながら200字程度で説明しなさい。

問2 日本で親たちが子育てと仕事の両立するために何が必要か。イギリスの親たちの仕事のやりくりと比較しながら、600字程度で述べなさい。

資料1

この部分は著作権の都合により公表できません

この部分は著作権の都合により公表できません

* 外国で現地の子どもの保育や家事をし、ホームステイ先の家族から報酬をもらって生活する留学生。

出典：品田知美・水無田気流・野田潤・高橋幸『離れていても家族』、亜紀書房（2023 年） 引用にあたり一部改変。

Ⅱ

資料2『こたつの進化は「火の分裂」―電化・小型化 見栄えも重視』（日本経済新聞、2023年11月13日）は、日本特有の暖房器具であるこたつのルーツを紹介している。これを読んで、次の問いに答えなさい。

なお、解答用紙には各設問の論述の最初に「問1：」、「問2：」と記し、それに続けて記述すること。

問1 こたつが進化してきた歴史について、特に脚を温めるための「熱源」に着目し、この資料から読み取り、300字程度にまとめなさい。

問2 こたつは、主に脚を温める目的の暖房器具である。脚だけではなく身体全体が、冬暖かく、かつ、夏涼しく過ごすことができる住まいとするためには、どのような工夫をしたらよいか考察し、500字程度で述べなさい。箇条書きでもよい。また必要に応じて、説明するための図を解答用紙の余白に加えてもよい。

資料2

この部分は著作権の都合により公表できません

この部分は著作権の都合により公表できません

この部分は著作権の都合により公表できません

出典：日本経済新聞、2023年11月13日夕刊

I

解答例

問1：イギリスでは、12歳未満の子どもをひとりで家に置くことが許されていないため、親たちは毎日学校の送り迎えをしなくてはならず、負担は大きい。しかし親たちは夏休みを2週間程度取れるので、家族で夏休みを長く過ごすことができる。さらにイギリスでは「柔軟な働き方」という制度があり、学期間のみ労働するという働き方が可能である。この制度を利用すれば、親たちは長期休みを子どもと一緒に過ごすことも可能である。(195字)

問2：日本では、イギリスのように小学生の子どもを学校まで毎日送り迎えする必要はない。また学童クラブも安価で、働く親にはありがたい仕組みである。しかし、そのような比較的恵まれた環境があっても、日本では、保育園や幼稚園に子どもが通う時父親が送り迎えをすることや、子どもが病気になった時も父親が対応しているケースはそれほど多くないと思う。日本では夫婦共働きであっても、子どもの世話や料理は母親の仕事で、父親の役割と言えば、お金を稼いだり、一緒に遊びに出かけたりすることが一般的だと思う。イギリスでは親が夏休みを2週間取ることができ、家族でそんなに長い旅行に出かけられるのは日本では考えられない。イギリスの「柔軟な働き方」の制度は素晴らしいと思う。日本の母親は仕事をやめたりパートタイムなど非正規雇用になったりすることが多いが、この制度があれば、仕事をやめないで、自身のキャリアを追求できる。どんな職種であれこれが認められるという点がすばらしく、特に子どもと長く過ごしたい父親やシングルの親たちもたいへん助かる制度である。

イギリスでは親が仕事時間を、子どもの生活にあわせることが可能であり、家族の時間を大切にできるような環境がある。これに対して日本では、家族の時間を本当に大切なものと見なしているだろうか。筆者が最後に述べている通り、日本では家族の時間よりも仕事を優先的に考える傾向が強い。これを改めるとともに、イギリスの「柔軟な働き方」のような制度を導入することが、子育てと仕事を両立できる社会への第一歩になるのではないだろうか。(659字)

出題意図

文章の意図を正確に理解し、それを自分の言葉で説明する力を見る。また働くことと子育ての両立と、ジェンダーについて興味を持って考えられるかを見る。

II

解答例

問 1：民俗学者 柳田国男によれば、室町時代から江戸時代にかけては、いろいろの火を始末したあとのおき火を灰に埋めて、その余熱を利用していたと推測される。江戸時代中期から昭和初期にかけては、木炭が一般的になったうえに、炭火を運ぶ器具の改良が進んだことにより、家屋の中で火を扱う危険度が下がり、いろいろに炭火を使ったこたつが広がっていった。1920 年には豆炭を利用したこたつが生まれ、1929 年、当時の松下電器製作所（現パナソニック）がニクロム線が熱を発する電気こたつを売り出した。1960 年にはレモン型の赤外線電球を取り付けた製品が生まれ、現在は石英やカーボンなど 3 種のヒーターを使った製品が生産されている。（296 字）

問 2：温熱快適性は、空気の温度や湿気、周壁からの放射熱、人体周辺の気流速度といった室内環境の物理的要素 4 つと、人体側の代謝や着衣といった 2 つの要素によって決まる。さらに、上下温度分布はない方がよい。以下は大学で学ぶ「建築環境工学」の観点から考察した内容であるが、これらの内容に準じた考察を、いくつか組み合わせ 500 字程度で解答してあればよい。

- ・空気の温度を効率的に調節できる冷暖房機器としてエアコンを採用する。エアコンの選定においては、冷暖房能力が部屋の面積（負荷）より大きめのものを選び、10 年程度で更新することにより、冷暖房の効率がよく省エネルギーになる。（106 字）
- ・エアコンの設定温度は、室内の気温が快適になるように変更、設定する。室内気温の目安は、冬季 18℃、夏季 28℃とされている。（58 字）
- ・エアコンの送風方向は、ルーバー（羽根部）を人体に直接当たらない向きにして、さらにフラップ（羽根部）を冬季は下向き、夏季は上向きとし、扇風機やサーキュレータを活用するなど上下温度分布を解消するように配慮するとよい。（106 字）
- ・冬季の暖房設備として、床面、窓周下部や腰壁部分、浴室やトイレに放射暖房を採用すると、足元の寒さや住宅の寒冷箇所を解消することができ、温熱快適性が向上する。（78 字）
- ・地中温度は年間を通じて 15℃前後と安定しているので、パイプを地中に埋設し、室内へ引き込むことにより、夏季は冷房、冬季は暖房として利用することができる。（74 字）
- ・住宅自体の断熱性能を高め、周壁からの放射の影響を抑制すると、上下温度分布の解消とともに温熱快適性が向上し、冷暖房負荷も削減される。特に屋根面は、夏季は日射による熱が侵入する箇所、冬季は暖房中の室内側の熱が逃げる箇所となるので、高断熱化の必要性が高い。（125 字）
- ・室内外の熱移動が起こりやすいガラス窓部分は、面積を小さくする、あるいは二重窓にする、断熱性能が優れた真空の複層ガラスやトリプルガラスとして、夏季の日射による熱の侵入、冬季の暖房による熱の流出を防御する。（101 字）
- ・東西面が南北面より小さい住宅とし、軒や庇を日が当たる東・西・南方向へ張り出して、壁面や窓面に対する日射の影響を抑制する。特に夏季は、東西面の日射を遮蔽するため、よしずやすだれを用いるとよい。（95 字）
- ・住宅の南側に落葉樹を植えて、夏季は南面からの日射を遮り、冬季は日射を取り込めるようにする。（45 字）

出題意図

日本特有のこたつや火鉢は、あくまでも手足の局所的な寒さをしのぐために暖を採る道具だが、身体全体を温めることはできず、健康維持および温熱快適性といった観点からは理想的な暖房手段とは言い難い。

問1は資料の表や文中から容易に読み取ることができ、問2では、夏の暑さをしのぐ手段を求めているので、単に冷暖房設備を充実させるだけにとどまらない対策を考察してもらいたい。資料冒頭に「住宅の断熱化やエアコンの性能アップ」という文言があるので、これをヒントに考察することも可能。